

胸部食道癌のリンパ節転移に関する臨床的並びに病理組織学的研究

著者	立花 孝史
号	605
発行年	1969
URL	http://hdl.handle.net/10097/18811

氏 名 (本 籍) たち ばな たか のぶ
立 花 孝 史 (

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 記 番 号 医 第 6 0 5 号

学位授与年月日 昭和 4 4 年 1 2 月 1 0 日

学位授与の要件 学位規則第 5 条第 2 項該当

最 終 学 歴 昭和 3 6 年 3 月
東京医科大学卒業

学位論文題目 胸部食道癌のリンパ節転移に関する臨床的並び
に病理組織学的研究

(主 査)

論文審査委員 教授 葛 西 森 夫 教授 笹 野 伸 昭

教授 榎 哲 夫

論文内容要旨

近年、食道癌の治療法としては手術的方法の他に放射線療法、更にはプレオマイシン等を中心とした癌化学療法も行われているが、その治療成績は現在胃癌のそれに比較し可成遜色ある状態であり、その原因の1つとして食道癌の場合リンパ節転移の問題が大きな障壁となつていると考えられる。そこで私は教室における食道癌症例について手術時の剔出リンパ節の転移状況を系統的に検索し、更に食道癌術后死亡例について剖検時のリンパ節を精査し、残存せる転移リンパ節の病理組織学的検索を行い、これらにより食道癌の手術時リンパ節廓清の範囲とその限界を知り本症の治療成績向上に役立てようと考えた。昭和40年より昭和43年迄の4年間の食道癌入院患者数は139例で、この中病巣切除は98例に施行し、切除率は70.5%である。手術症例98例を癌占居部位別に見ると、頸部食道癌7例、胸部食道癌82例中上部23例、中部31例、下部28例で腹部食道癌9例である。今回著者は胸部食道癌切除例中術前非照射50例と、又これと同時期に行なつた術前照射23例について、そのリンパ節転移を検討し、更に過去7年間の食道癌術后剖検27例のリンパ節転移について臨床病理学的検討を加えた。リンパ節転移程度分類は食道疾患研究会の食道癌取扱い規約に準じ各リンパ節を区分検討した。胸部食道癌非照射例50例中組織学的にリンパ節に転移の確認された症例は30例でその転移率は60%である。廓清し鏡検されたリンパ節総数は569個でそのうち組織学的に癌転移の認められたリンパ節数は128個で転移度は21.6%である。転移部位は噴門部リンパ節が36%と最も多く、次いで胸部旁食道リンパ節転移が30%であつた。癌占居部位別にリンパ節転移程度をみると、 n_3 の遠隔リンパ節転移を認めた症例は37.5%、中部食道癌では33.3%、下部食道癌では54.1%と病巣部位が下方となるに従ひ高率となる。このことは癌占居部位が上部に在つても腹腔内リンパ節廓清が極めて必要であることを示している。他方癌占居部位より上方のリンパ節転移が稀でないことにも注意を要する。レ線所見とリンパ節転移との関係については早期型2例はリンパ節転移はなく、鋸歯型、ラセン型、漏斗型の順に遠隔リンパ節転移が高度となり、漏斗型では83%と高率に遠隔リンパ節転移を認めた。レ線陰影欠損の長さとの関係では5cm以下の12例中 n_3 の遠隔リンパ節転移を認めたものは僅かに1例8.3%であつたのに対して、陰影欠損の長径が延びるに従ひ n_0 の症例は少なくなり、 n_2 、 n_3 の高次リンパ節転移が高率となり、特に10cm以上の症例では n_2 28.6%、 n_3 43%と極めて高率に遠隔リンパ節転移を認めた。手術時、肉眼的の外膜浸潤程度とリンパ節転移との関係をみると、外膜浸潤が高度になるに従ひ遠隔リンパ節転移が増加していた。更にこの関係を組織学的に深達度についてみると、筋層外膜に

迄達していた症例では n_2 24.4%, n_3 36.6%で筋層内に止る症例とはリンパ節転移の程度が大きく異り、深達度はリンパ節転移度に極めて重要な役割を果たしていることを知った。一方組織異型度とリンパ節転移とは相関々係を示さなかつたが、浸潤度は深達度と共にその程度が強い程遠隔リンパ節転移が増加する傾向を示した。生存期間とリンパ節転移との関係では $n_0 \sim n_3$ の各リンパ節群とも術後1年で50%前後となるが、 n_0, n_1 で長期生存の可能性がみられるのに反し n_2, n_3 では2年以上の生存例はなく食道癌手術の予後はリンパ節転移の程度によつて大きく左右されていることが分つた。次に術前照射例と非照射例に於けるリンパ節転移の状況を比較してみると、自覚的症狀の改善を認める3000R前後ではリンパ節転移に関し両者間に有意の差を認めなかつたが、病巣障害度高度となるに従い照射例で n_2, n_3 の転移率は高率となり、著者の症例中特に中部食道癌の場合、術前照射例で2次、3次のリンパ節転移形成が高率であつた。又術前照射例の手術成績とリンパ節転移との関係をみると、 n_0 群では非照射例の生存率に比しやゝ良好な成績を得たが、 n_2, n_3 群では照射例と非照射例との間に有意の差を認めなかつた。食道癌術後剖検例については、27例は何れも根治手術例で、これらについてリンパ節転移状況を検討した。即ち剖検時採取し得たリンパ節は909個で転移度は10.7%である。27例中術前照射は17例で転移リンパ節を認めたもの5例29.4%であり、非照射例では10例中4例40%にこれを確認した。これら転移リンパ節の部位は術前照射17例中深頸部リンパ節転移4例、気管及び気管分岐部リンパ節3例でこの他後縦隔リンパ節、胸部上部傍食道リンパ節に転移を認めた。一方非照射10例では対側肺門リンパ節2例、気管及び気管分岐部リンパ節2例でこの他後縦隔リンパ節に転移を確認した。術前照射剖検の25%に頸部リンパ節転移を証明し、非照射例でこの部のリンパ節転移がみられなかつたことは必ずしも照射の影響とは云得ないにしても術前照射に際して注意すべき問題と思う。結局術後剖検例の検討から、食道癌手術時充分リンパ節を廓清したと考えられる症例で尚深頸部リンパ節、偽気管及び気管分岐部リンパ節、対側肺門リンパ節、後縦隔リンパ節等に転移を認めたが、この事は取りも直さず食道癌手術の困難性を示すものであり、食道癌治療成績向上のためには更にこれらの部のリンパ節に対する処置、特に術後照射の重要性を強調したい。

審 査 結 果 の 要 旨

手術前照射を行わない50例と照射を行つた23例、計73例の胸部食道癌切除例の手術時所見及び切除標本からリンパ節転移について検討を行い、さらに食道癌切除後死亡、剖検を施行した27例について遺残リンパ節転移を検索し、胸部食道癌手術に於けるリンパ節廓清の問題を検討している。

非照射手術例の転移率は60%で、噴門部リンパ節が36%と最も多く、遠隔転移が32%に認められている。遠隔転移はレ線像で漏斗型のもの、陰影欠損の長いものに非常に高率であつた。組織異型度、又は細胞異型度との間に相関性を認めていないが、浸潤度、深達度との間には密接な関係を認めている。リンパ節転移と生存期間は密接な関係があり、 n_2 、 n_3 では2年以上の生存例はなかつたと云う。

手術前照射例では、照射による病巣障害度が高度のもの程遠隔転移が高率であり、他方照射による生存期間の延長は転移のないものではやや効果を認めたが、遠隔転移のあるものでは効果は認められなかつたと云う。

手術後死亡例の剖検所見では、30~40%にリンパ節転移の遺残を認め、特に照射例では頸部、傍気管、対側肺門リンパ節転移を高率に認めている。

以上の成績より、上部食道癌でも腹部リンパ節転移が高率で、下部食道癌でも上縦隔リンパ節転移が稀でないことなど、食道癌根治手術に際してのリンパ節廓清について再考を要することを指摘すると共に、現在の手術方法では廓清し難い部位のリンパ節転移が少くないことから、手術後照射を重視すべきことを述べている。又手術前照射が遠隔転移を促すことが疑われる事実を指摘していることは、癌転移の今後の研究に示唆を与えるものである。本研究は食道癌の治療について寄与するところが大きく、学位授与に値いする。